

書 評

八塚春児『十字軍という聖戦——キリスト教 世界の解放のための戦い——』 日本放送出版協会，2008年。

小 野 賢 一

十字軍概説書とは、おそらく長い間、壮大な物語＝神話、宗教的恍惚、感動、を要求する読者と、その期待に応える著者の共犯関係の上に成立する文芸ジャンルと看做されてきた。我が国の先学からは、十字軍概説書は、教皇の呼びかけに応え蜂起する人々、あるいは民衆の主体的な武装蜂起から始まり、やがて道徳的な乱れから異教徒の逆襲を受け挫折し、最後に兄弟愛溢れる共同体の一体感を呼びかけ懺悔して終わる、というステレオタイプの物語の構造を有する特異な文芸ジャンルと看做され、忌避され続けたように思われる。だが、ようやく実証的な概説書が物された。それが本書『十字軍という聖戦——キリスト教世界の解放のための戦い——』である。本書は、著者の約30年に及ぶ十字軍研究の成果を一般向けに書き下ろしたものである。本書の構成は次のようになっている。

はじめに

- 1 第1回十字軍の召集
- 2 教皇の意図
- 3 十字軍思想の形成
- 4 第1回十字軍の諸侯たち
- 5 聖地国家の成立
- 6 民衆十字軍
- 7 12世紀の十字軍
- 8 第4回十字軍
- 9 十字軍の多様な展開
- 10 ルイ9世の十字軍

11 非東方十字軍

12 十字軍の終焉

あとがき

参考文献

以下においては、まず(1)本書の十字軍の定義を整理し、次に(2)従来の十字軍概説書にはない本書の独創的な見解を紹介し、最後に(3)本書に対して提示された批評について検証したい¹。

(1) 十字軍の定義

十字軍とは、教皇の命令で十字の印をつけた軍隊、教皇主導の聖戦を行う軍隊である、と本書は明確に定義する。十字軍とたんなる聖戦の区別は「教皇によって宣告され、教会により管理・統制される」(77頁)かどうかである。一般に、キリスト教的聖戦思想を持った軍隊(テロに対する十字軍など)も広義の十字軍に含まれることがあるが、本書ではそれを含まず、十字軍を中世特有の現象、もしくは中世の十字軍の特徴を明らかにするという論旨で纏められている。それゆえ1095年のクレルモン会議における十字章の公示をともなって、十字軍は開始され、16世紀の宗教改革で転機を迎え、17世紀に十字軍は終焉したものと定義する。特に十字章に関する記述(42-51頁)は、ラテン語史料解説に基づく高度な実証研究²のエッセンスを一般向けにまとめ直した箇所であり、本書の白眉といえる。本書は、通説とは異なり、1291年のアッコン陥落、聖地国家の滅亡を十字軍の終焉とみなす立場をとらず、また、対トルコ「神聖同盟」を十字軍に含まないのも、十字軍を中世特有の現象と捉える立場による。十字軍を描くのみならず、ヨーロッパ中世の教会と社会の全

¹ 本書は、「関西中世史研究会」「関西ビザンツ史研究会」合同の合評会(2008年12月20日、於京都大学)でとり上げられ、十字軍研究史におけるその重要性が認識された。評者はその折、本書について批評する機会を与えられた。本稿はその折の議論を踏まえて加筆したものである。

² 八塚春児「十字章考証」(関西中世史研究会編『西洋中世の秩序と多元性』法律文化社、1994年、所収)

体像が鮮やかに浮かび上がる本書のダイナミックな構成は、曖昧さのない明確な「十字軍」の定義によるものだろう。

本書によると、十字軍の目的は「キリスト教世界の解放」である。東西教会統一、俗権との闘争、平和運動、宗主権政策なども、「キリスト教世界の解放」という大きな目標の一部であり、「改革期の教皇にとって第一義的重要性を持つものは、教皇のイニシャティヴ下へのキリスト教世界の収斂であり、十字軍はその一手段に過ぎないのである」(224頁)という。いずれの定義も思いつきなどではなく、著者の精緻な実証研究の成果の上に構築された学説であり、緻密な検証作業とそこから導き出される明快な主張に圧倒される。

(2) 独創的な見解

本書は、刺激的かつ独創的な見解で溢れている。第1回十字軍(1095年)の(イ)「エルサレム解放」説と「東西教会統一」説への疑問、(ロ)「クレルモンの神秘」の否定、(ハ)第4回十字軍(1198年)の「ヴェネツィア犯人説」の否定、(ニ)非東方十字軍を正式な十字軍とみなす見解、(ホ)教会史への十字軍の正確な位置づけ、などの独創的な特徴を本書は示す。

「ビザンツからの要請は一つのきっかけであったに過ぎないことを示している。しかも、ビザンツへの言及はあっても、それと教会統一への期待を結びつけているわけではなく、この点でグレゴリウス7世の書簡とは明白に相違している」(71頁)と、グレゴリウス7世とウルバヌス2世の政策の違いを的確に捉え、先行研究で主張されてきた「エルサレム解放」説、「東西教会統一」説に対して疑問を投げかける。この簡潔な記述には「グレゴリウス改革(教皇改革)」を一面的なものとして看做さず、その重層性を指摘する教会史研究の成果が採り入れられているように思われる。

「クレルモンの神秘」は、十字軍概説書で最も劇的な筆致で描かれる箇所である。教皇中心の多元主義史観であるにせよ、あるいは民衆中心の民衆主義史観であるにせよ、人々の琴線にふれるこの劇的な情景の描写は否定されなかった。十字軍研究が、壮大な物語＝神話、宗教的恍惚、

感動、を要求する読者と、その期待に応える著者の共犯関係の上に成立する文芸ジャンルたり得たのは、出発点の「クレルモンの神秘」ゆえであった。ところが、本書は、「少なくとも「神が欲する」の叫びとともに、クレルモン演説が全欧津々浦々に伝えられたなどとは信じないほうがよい」(41頁)と、十字軍神話に感情移入して熱狂しようとするようなタイプの読者に冷や水を浴びせかける。本書では、クレルモンの演説が十字軍運動で果たした役割を軽視し、さらに追い討ちをかけるように、「クレルモンの神秘」の伝説を粉々に粉碎する。そして「神が欲する」というあの感動的な教皇ウルバヌス2世のことばは、実はクレルモンの演説にはなく、南イタリアのノルマン人の十字軍士ポエモンドの軍隊で使われていた合言葉にすぎない可能性を指摘する(39-41頁)。Deus vult という表現の出所が修道士ロベールの記述だけであり、その表現の大半がポエモンドと結びついて用いられることなどから、文献学的に検証を重ねた結果、本書は「クレルモンの神秘」に異を唱えるのである。

(ホ)の問題について敷衍したい。「叙任権闘争以後インノケンティウスが即位するまでの約1世紀間、教皇権は皇帝権に対してむしろ押され気味であった」(162頁)と、本書は教皇権と皇帝権の力関係を正確に捉えた上で「二重選挙によって帝国の内紛が明白となり、(省略)そうした状況の中に、教皇は帝権に対する教権の優位を宣揚する好機を見たのであり、その手段として十字軍を召集したのである」(164頁)と聖俗の力関係に留意しつつ、教皇改革の中に「手段としての十字軍」を位置づけている。

第4回十字軍(1198年)の「ヴェネツィア犯人説」の否定の記述の斬新さに、高等学校でかつて世界史を履修した者は驚かされるだろう。だが、それに加えて「(コンスタンティノーブルへの)転向計画は教皇から独立したところで進められたのであり、教皇は新しい局面が展開するたびに慎重に原理原則論を主張して自己に責任がかかる事態は避けつつ、そこから最大利益を引き出そうとしたのであった」(186頁)といった教会史全体に目配りした上での適切な状況把握が随所に見受けられるのも本書の特徴のひとつである。

本書は、かつて教会史研究の領域で支配的であったピューリズム・ポピュリズムを過度に称揚する見方に、十字軍研究の領域から修正を迫る

ものである。純粋な十字軍が「宗教的動機から世俗的利害へ」と次第に退化してゆくという従来の十字軍概説書の図式を、本書は否定する。この本書の見解は、俗人の霊性が、むしろ後の時代ほど高揚するという最近の霊性史の研究成果を正確に反映しているといつてよいだろう。三島由紀夫の『海と夕焼け』という少年十字軍を題材とした短編について、三島自身が『憂国』の解説のなかで、『憂国』とともに「私にとって最も切実な問題を秘めたもの」と述べているという(10頁)。かつて我が国で少年十字軍が「純粋な」愛国心の道徳教材の如く扱われてきた事実をこの箇所は暗示する。宗教的であれ、政治的であれ、過度なピューリズムに対して本書は否定的見解を示す。十字軍神話ではなく歴史的事実としての十字軍に目が向けられているからであろう。ポピュリズムの問題については(3)で述べたい。

(3) 合評会で提示された本書に対する批判の再検証

特に合評会の組織者で十字軍研究が専門の櫻井康人氏から提示された批判は本質的な問題を含んでおり、再検証に値する。なお、櫻井氏の批判の論点は氏自身による書評で整理されている³。櫻井氏の批判は特に「贖罪」「民衆」「平和」「解放」という4つの言説に向けられた。

櫻井氏によると本書はライリー＝スミス学派の多元主義史観(教皇中心史観)に基づいて叙述されているという。多元主義史観では、十字軍の本質を「贖罪」のなかにみるが、本書ではこの問題にほとんど触れられていないのはなぜか、という疑問が櫻井氏から提示された。巡礼は「贖罪」の旅である。十字軍が巡礼の一種であるならば、十字軍も「贖罪」行為であろう。しかるに十字軍士の後裔の騎士修道会の会員であるライリー＝スミスにとって、十字軍は「贖罪」行為そのものであり、「贖罪」は秘蹟である。新教の立場の者は逆に「贖罪」が秘蹟であることを断固として認めない。つまり神学上の問題と絡めて過度に「贖罪」を重視したり、その意義を貶めたりする論争から適切な距離をとり、西洋人のアイデンティティの問題に立ち入ることを本書は避けたのではないか。

³ 『西洋史学』231号, 2008年, 84-86頁。

その分ピューリズム批判と関連させて、十字軍概説書として本書は史上はじめて日本人のアイデンティティーの問題に深く踏み込むという慧眼を示した。

次に櫻井氏は「民衆十字軍は、十字軍としてはほとんど意味のないものであり、最近では十字軍研究者の中でもあまり重視されない」(136頁)という本書の主張に疑問を投げかけた。氏の疑問は「民衆」概念の理解のずれが原因であるように思われる。確かに本書では、十字軍の理想を体現する主体は純粋な民衆である、とする民衆主義史観の代表者アルファンデリーの主張に否定的評価を下している。だが、アルファンデリーの想定するような階級闘争の主体としての純粋な「民衆」が中世に存在するのだろうか。その「民衆」のなかに「諸侯」は含まれていない。史料に現れる *populus* というラテン語は諸侯、貴族、聖職者を含む概念であり、「民衆」ではない。近代の概念を中世に持ち込むことに対して本書は疑問を投げかけているのである。櫻井氏の考える「民衆」は王侯、貴族以外の人々といった漠然とした概念であるように思われる。本書の「民衆」概念とは定義が異なる。

また神の平和運動と十字軍の関連について本書が十分な頁を割かなかったことに対して櫻井氏が物足りなさを感じておられる点は理解できる。だが、神の平和から平和軍を経て十字軍へ至るプロセスは、十字軍の前史の研究であり、限られた紙幅の中で十字軍そのものを論じるという本書の性質から考えて、主要な課題とすることはできなかったのだろう。

「キリスト教世界の解放」という理念は、「第1回十字軍の前後で何らかの変質を見たのか」という櫻井氏の疑問は本質的である。「解放」は本書の最重要概念である。キリスト教世界を異教徒や不信仰者から解放する、とは如何なることなのか。教会史家にとっては耳慣れた用語だが、本書ではインノケンティウス3世期の教皇の至上権と結びつけて理解されているように思われる。律修教会を重視したグレゴリウス7世と、イヴ・ド・シャルトルの助言を受けて聖俗協調理論に基づき在俗教会にも多大な関心を示したウルバヌス2世を同じ「グレゴリウス改革者」という範疇で一括するのは、あまりに乱暴であろう。櫻井氏の指摘するように、グレゴリウス7世期、ウルバヌス2世期、インノケンティウス3世

期の「キリスト教世界の解放」という理念を、言説空間の中に適切に位置付け、その実態を解明する必要がある。

最新の実証研究の成果を取り入れた本書は、十字軍研究の概説書としては最高水準に達しており、残された課題の大半は教会史にかかわるものであることが明らかになった。教会史が専門で畑違いに思われる評者が、本書の合評会の評者として指名された所以が理解された次第である。櫻井氏の慧眼に感謝するとともに、本書が教会史研究に突きつける課題を重く受け止めたい。